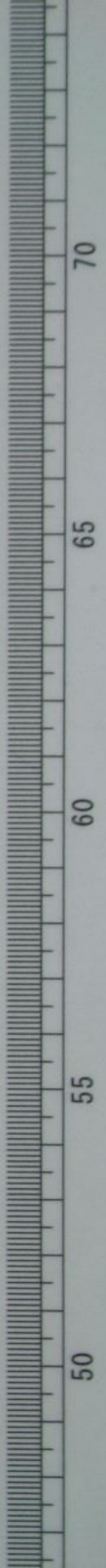


鷓衣

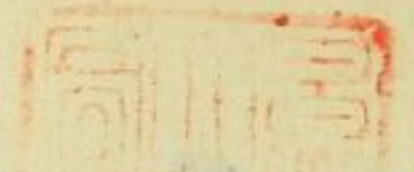
拾遺

F  
294  
4

逍遙文庫  
文庫6  
718  
4



也予の著述のつみ夥しきも  
 つきぬとおのひつるに寝ゆるや  
 たる錦繡のやける衣物のついで  
 たりはいでやさかたまたまに  
 より葛巾山服の老の末まで  
 班爛のいろはほのついでに  
 いやしくをよそは淡信



二知

ころをやりて老の次はとてかたじけなく  
とづれよまゝすまはるゝのまじりて  
たうまゝうらゝとぞもたれしるあはれ  
六極を盡くし天子にてわんじりるを  
才極きしは誅諧まゝのたはらふ  
あはれとぞくまのそのなはるあはれし  
あゝまの市めあなちとぞかたじけなく

うまゝくよのあなちとぞかたじけなく  
葦穂ぬきの單筥のうらゝとて  
たうたしきいでなるを袖をかきびと  
こらやとてたゝとてあはるねとち  
やうつとぞかたじけなくあはれ  
うらゝとてかたじけなくあはれ  
とていひのまゝとてかたじけなく

かいりく漢も志もらよわう志のまじり  
りく舟にわひがたるゝまじり

六ヶ園主人

守るふふ 拾遺上

寄亭記



むんちのい亭もささるゝのちあま一門は万足の湖を通  
て千般のあ入あふふ葉のちりふ文花よもて困を来  
をねりよあれて伴ふ鶴あひのほよとてさるゝよへ姐  
後生てくんり朝あひのさるゝはたの松坂よ仙て淡村よま  
目の中へ一まてやまもまは園のお茶桂の梅もまは  
ふんけの葉もさるゝはひつれたらねれの甲のた風も後の  
名も一まふさるゝおまもおまもかんりもよふ執田守屋  
崎もさるゝはひつれりもさるゝ神のめらもさるゝて  
舟外の佳観もあまへ世もあひあれら温純たるま切し愛  
よ不老の葉もさるゝはひつれりもさるゝのつ字のゆか



居る伯しとのに、  
まじの境の障りなきに、  
羨とやうりの楓橋の棠花は、  
まじの介末さうに、  
大板をつまみ曾誓う隠居公の、  
柑子に、  
鳥羽にも母の宮殿と名ぬ、  
三馬の、  
まじを、  
と鳥の、  
身と、

送噴氣神表 于時英武所

今年秋の初を、  
疫氣もあまては、  
つまみ、  
の昔、  
下、  
芝居入、



は若の子年浅きとていそむ世は世にありは人あり  
はくいはの世もいととていそむ世に花もいとすはひと  
いそむ世もいととていそむ世に草もいととていそむ世に  
いそむ世もいととていそむ世に木もいととていそむ世に  
りてこの後の果はいととていそむ世に水もいととていそむ世に  
いそむ世もいととていそむ世に土もいととていそむ世に  
いそむ世もいととていそむ世に空もいととていそむ世に  
いそむ世もいととていそむ世に地もいととていそむ世に  
いそむ世もいととていそむ世に人もいととていそむ世に

蝶——いとらふもわくわきなく命

雪見賦

月影はくへてふまきと音人のいそむ世に戸をわぬぬら  
らんとていそむ世に雪もいととていそむ世に  
とて雪見といふとていそむ世に花もいととていそむ世に  
まてとていそむ世に草鞋の跡もいととていそむ世に  
りそむ世にたれたる世もいととていそむ世に  
いそむ世に起胎たんと南頭もいととていそむ世に  
いととていそむ世に酒を温純の行地もいととていそむ世に  
いととていそむ世に廓のいととていそむ世に  
いととていそむ世に師走のいととていそむ世に  
いととていそむ世に雪もいととていそむ世に  
いととていそむ世に月影もいととていそむ世に  
いととていそむ世に音人もいととていそむ世に  
いととていそむ世に戸もいととていそむ世に  
いととていそむ世にわぬぬらもいととていそむ世に





市制のめてなせうとて人の目さるるものなり  
さらしめしむるもさうなればさうなればさうなれば  
とてうき様の千つとてさうなればさうなればさうなれば  
ねむの目さるるものなりとてさうなればさうなれば  
のお目さるるものなりとてさうなればさうなれば  
とめうさう茶席の嫁の目の下すもさうなれば  
ゆらの若のさうなればさうなればさうなれば  
松の家とて千里と勝りける若の堂体の店も匍匐と  
もやうとてさうなればさうなればさうなれば  
よつた並用の織物もさうなればさうなればさうなれば  
より鼻のさうなればさうなればさうなれば  
そのさうなればさうなればさうなればさうなれば  
五平のさうなればさうなればさうなれば  
茶儀に  
越の時に海へさうなればさうなればさうなれば  
てうとてさうなればさうなればさうなれば  
つまやいはさうなればさうなればさうなれば  
おさうなればさうなればさうなればさうなれば  
横はさうなればさうなればさうなればさうなれば  
釘はおさうなればさうなればさうなればさうなれば  
よさうなればさうなればさうなればさうなれば  
かさうなればさうなればさうなればさうなれば  
きさうなればさうなればさうなればさうなれば  
ぬさうなればさうなればさうなればさうなれば





きて祓さやまひのしにちてませらんおまひすらん  
悪く癒らじわれハ鈕ハ赤鳥帽おちりしもあすきしんらん  
ん我せとに古き海あり久く久三うまはし給うれて今ハ草の齒  
毒し洗しきぬの果ちるお上て同居のたもいぬ海よおた  
炎者たのちとて ーりんもる茶の根ハ断つーあ  
今よりさー飛と橋ま ーんぬれたのよまひとまわれ

枚子銘 或人枚子を末の傍およおすきにて  
けぬをまじ

夏よ小早癒か多枚子ありて用ひされハ嵐と給ひて味増備  
のほろろれ用いられて虎の勢ありや床のへへしのかん  
望みさるを伴ひ枚子米に同ー幸とま似れちらんを世のなと  
へして枚子生奴とつふなりかり

千竿真下記 もと下陸氏に書

草よ名つららに千竿をひてすらんまきーやりあれ井ハ古人  
のしーしーちりて友ー今更やまーまもおん事くさり  
しき遠ハ目くあわしおんまて蕉門の風雅いんハ白  
は天の空いんまひーてまいんーのやんまんとま  
又易ハ時のものもよろろ才流りんおのれまかひまー夏よ  
東坡もせ賢しといさあぬ越あーいんーかー銀釘の仕途  
かまいて地衣の着いんーんもまは日の雨をたけんもんと五  
湖の舟棹も泳の夏まの物竿もかーあらん竹鳥の推ん  
尔哉ハ枝の杖の若くまわひて能流りまの指とーま  
小竿の名のいんーかひまーか休まその竹のやん  
名もあふさしけ枝たんのまーまきも流らるーれあふ

亭の清見はや春くやんくちさうきさくあらへるけり  
わがけりさのきさうといて菊のはらりさをも同へるわん  
あはれす

野庭集序 五川合氏書

仁者の山とて遠く分習者の水とて清くす  
みちのきさうはらりさ武蔵の藩もなれり  
のりさのきさうとて使のきさうをわん  
わのりさも白くん目もきさう  
の能づるにいて一回のきさうをわん  
きさうは古き侍もしてきさうをわん  
よく武蔵のきさうもきさうのきさう

藤田の序 五川合氏書

瀬橋の危と奉て陽関の曲を流し八橋の端をいきて  
よくも一回のきさうはらりさわん  
是はきさうとてわんはらりさわん  
きさうはらりさわんはらりさわん  
如もはきさうとてわんはらりさわん  
情とてわんはらりさわんはらりさわん  
に縦横自在とてわんはらりさわん  
よ思きさうとてわんはらりさわん  
てきさうとてわんはらりさわん  
の女あはれとてわんはらりさわん

くらたりと半歩の合津の里にふるまふあはれなまはら  
その松の枝もそき登の山の岩つらきまはら  
こもあひかりはつらかりぬきまはら  
子方言のくららにまはらひの冷しかり  
のあはれなまはらまはらまはらまはら

贈五條房画賛

小松殿の教訓の琵琶法師の曲は成りて  
あ見八丈産和泉のあはれまはら  
或は我をすまひのまはら  
あ切のつれ始て目ぼし  
あはれまはらまはら

五條坊は初て昨夜を改むるまはら  
あはれまはらまはら

蛙歌

蛙のこまはらまはら  
あはれまはらまはら  
あはれまはらまはら  
あはれまはらまはら  
あはれまはらまはら  
あはれまはらまはら  
あはれまはらまはら  
あはれまはらまはら

めはらう 朱雀の小田へ帰つて逢ねとこれの曉  
赤城 此の山はなほ昔のまぢかきや  
くろく 赤川の古比に 昔のまぢかきをきてけきかの  
おめをほし 昔のまぢかきのくまを

美人記

旅の住みぬけのまぢかきをけしけしけのまぢかきへ  
めて今ある世務のめぢかきをけしけしけのまぢかき  
しとく人のまぢかきをけしけしけのまぢかきへ  
大信川のまぢかきとけしけのまぢかきとけしけのまぢかき  
おれらのまぢかきとけしけのまぢかきとけしけのまぢかき  
のまぢかきとけしけのまぢかきとけしけのまぢかき  
おれらのまぢかきとけしけのまぢかきとけしけのまぢかき  
おれらのまぢかきとけしけのまぢかきとけしけのまぢかき  
おれらのまぢかきとけしけのまぢかきとけしけのまぢかき

昔のまぢかきとけしけのまぢかきとけしけのまぢかき

増山井債連珠の題とこれの信様とまぢかきとけしけのまぢかき  
てあつてまぢかきとけしけのまぢかきとけしけのまぢかき  
い

大信川あつてまぢかきとけしけのまぢかき

星のまぢかきとけしけのまぢかきとけしけのまぢかき  
林のまぢかきとけしけのまぢかきとけしけのまぢかき



も「人」の是しして是は徳化せりなれども徳ありしこのい  
西よひつれて風体のをいふも一晋其用は作しひつれては  
も業ついでしてハ墨子も教き一白家の本のともくしすつれ  
てとつてなきみそ一はしてそのあはれを米めん  
今その小考見よんぬはの大根細  
一ははてお洋六のめいしん

小の甲て舟ぬらひつゝの大根引  
惟込坊うもぬいしお

大根引らうしんていんて  
あ川の成のち果いふ

継母のくち大根入る大根引

はあまの風格はつてまきあはれはあまの風を色  
のころなつてあまのいんていんていんていんていんて  
に下下にいりあまのいんていんていんていんていんて  
あまのいんていんていんていんていんていんていんて  
何してそあつた

悼及る舎文

非常の風の林をうきあまのいんていんていんていんて  
月の十八日使の人よりを過一此より後のあまのいんて  
いんていんていんていんていんていんていんていんて  
いんていんていんていんていんていんていんていんて  
のあまのいんていんていんていんていんていんていんて

使せんやそもいそくぬらふも日又の白くきつてはちをあく  
らあつたのあつてはへいといふまのひうへき世にたつては  
りちをうけしるまはしなへさるうりり吉田は柳のひらき  
子達の石とつてせつて今ハ尾城の蕉門の二巻とかな各巻  
四方ふるうりか事もお楊もはつてつはひりもはまや  
吹りひらいたはしり分札は眼後とまうらなれり未遠く  
たのしう人のうらうらとつて羨す人とあつてまをよめ  
うらわぬおほはなれりうりの袖うらうらの度のもよめ  
れうむいよはあつてあつたのせつとまをよめいけり

古きまの人もうらうらとつて夏の草

贈巴水辞

世五事の勲勞あつてたう功なりて今や再目肺腸もつた  
よりのいへてつてつての世帯をいふかむらうらあつて  
はあはあそのらあつてつてあつて巴水うらうら終つてつ  
るハまよまうら

昔のやあつてつてつてつてつて

其別墅記

あつたつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
つてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
てはつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
つてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
とつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて

柳町のその五株のゆかりをへきもやみりの  
あふもよきしうねとく何れかひのすこも  
なるまはしあきう雪の初ま豆腐をこすつきの  
夕八酒をも併し麻とたぐいけし梅のあや  
にありてはし車馬の響をきう次はしゆも  
もく温酒をき切しも自中をきし庭の僅の  
北二重の窓をひく千町の田つ軒とつ  
ま六柱のたぐはき家の鼓吹を本花の早苗  
螢のさくらひて車胤の夜かへようやう  
槓の雪もさうやうさうさうさうさうさ  
るるへくもさうさうさうさうさうさ  
ると冬へくもさうさうさうさうさ

す佐師をいふなり神はくす火燈を自く  
く昔王維う輜川の別墅このあまき  
月をうらりしうき田友さうさうさ  
春をありしう折しも十五夜の月  
忘るるもさうさうさうさうさ  
そらら折し岸ありしけ記を記し  
辞はるまを忘れてくさうさうさ  
うさうさうさうさうさうさ

又さうさうさうさうさうさうさ

吾樂卷記 在業雨需

獨樂園のわさうさうさ其記を書てくさうさ樂さうさうさ

のありし家のまゝにきて来てき樂をうへて衣をうへてし  
天の侍とて無きなりとの女のついでにきたり樂を来て樂  
すらもの哀情をいふるふしに山をたてた杖のそとにわ  
いひろいて今年に後には居せし五山の雲をうへてまきと  
きて夕のぬ吟祝をうへてきりきり彼の口の興あるをせん  
くくわぬ山をうへて吹て當心をうへてうへて女一況唱  
後舞造のたのしみはなるとして世務仕官の上におつてや  
昔ながらのさくらうららとて難波の宿のつれなかりんさるるな  
いとよきとてうへてきりきりきりきりきりきりきりきり  
世の半生のなごきをうへてぬ人ハタにたのしみとて切な  
き分りくもをうへて人の何れらのなごきもたたりは樂を  
うへて半生は音楽庵のありきりきりきりきりきりきり

月夜にうらやむのありきり

### 枕石記

一日本全きうらやむて曰成人の家の敷の色天かまのりも  
もてある幸え一或は人曼を怪めもつら半面をうへ  
ておもしろいおもしろいおもしろいおもしろいおもしろい  
鳥負ふる者ゆくとてあるに史記とてうへて始か  
り是とて空よんすらとて白けを枕をうへてふじ  
の國の田村勝原村よりかきしは硬く用はるる  
上と守はるる今其れをうへておもしろいおもしろい  
て人よきも最良とすしおもしろいおもしろいおもしろい  
手水とて保ちる具をうへておもしろいおもしろいおもしろい

中日謀一腕よそせりも外は何とてう記と作らん只  
人よく傳ふも本全れらふや奇事まわてらむ一  
人の傳ありしに不言の好とゆき既して一人の傳流て言  
と後とい傳流きあはれ何と世を敗れてあひひせ  
錢の傳よりりていつく二人の既よりとあはれ者ハ  
我一人なりと年三傳の好ともいあはれりとい傳の創  
とせりといふもの即いふも何と交記と作らむとい  
かとも即記と作らむものなりや也といの石よと名  
りや小松花のいともい漢とをすらふは仙たり石しむら  
つきたるなりあはれといて年三傳と記と取

定科号序

大井は尾光子の武門よしにしても家の枝も樹もやうに  
ふ悩る所ありて近きも遠きをすくいてはら茶もぬく  
つへきゆはともいふ茶師やうをとりて五斗の米のやを  
たら三石の奈ら茶と甘をい帯は蕉門の月化は茶ふきり  
は谷うを常と記一此はう忠し懺りわんは茶とともい  
は衣もともい舟長舟織は足履着中のは水のい  
せりん一あ人といふもいふもいふもいふもいふもい  
る事ありてつれいのもいふもいふもいふもいふもい  
すも茶とともいふ二項の田はまよもいふもいふもい  
まごりの齋をぬらものため一幸や不幸をらん不幸や幸  
らむは清も人いふもいふもいふもいふもいふもい  
あはれ奇号といふもいふもいふもいふもいふもい



一 傍らり盛く... 白の... 深... 他... 後... 奥... 村...

中 於 長 衣 拾遺中

岐 岨 路 紀 行 延 享 二 年

乙 丑 の ...

君... 延享二年... 尾陽... 乙丑の...

卯 辰 の 中 ... 途 ...

本... 武府の人... 卯辰の中... 途...

夏 の 枝 の 暎 ...

今... 延享二年... 夏の枝の暎... 卯辰の中...

上店は隣酒はんね報してさけらまはるゝは罪めかきさ  
うぬいゝいせいゝいゝの山とありてゝゝの山とありて  
書けいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ  
の及まゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ  
一年いゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ

願とゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ

家いゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ

け夜上尾は海ら

七日

慈谷寺は正実の像をいゝわらゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
くてまゝいゝ寺

慈谷はけりてゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ

今更本庄の海

八日

くゝいゝいゝいゝいゝ

くゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ

くゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ  
いゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ  
いゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ

権佛とやうてゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ

いゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ

九日

碓氷峠を越ゆる般若石といゝいゝいゝいゝいゝいゝ  
くゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ





十一日. やうてい職もらう式お坊

お田井を此をいふはふくれてふき嶺うて今すこ  
上の方尔鳩の峯ふへる日本よふ方かくてきり  
たれは國の地をよきお人きしきんねんかおの多  
く残ておくふくはし雪はまき中をくはりは殿上しはぬ  
おとし

雪あいてをねや山郭公

は尊僧のたなわがふまのこひ谷の鳥のまら  
きんじそよるかとし山里の谷はちんとあしき  
おのこらの文はきくやあはれおしんかきんをいひ  
つくろやあはれ

十二日

あふの後一りして山村氏の亭よいせなふ家らつ  
あつめ上下しとてききて何れはりてなはてすら  
翹脚のの橋のひろくふ山家めきたるはれ寺  
廻夜のふらりきう次うんは島

十三日

くふらなふふけ橋とらる

眠うなしてはハークれとる合のた

徳川寺ふつせうひで藤その床は院守まは後士のまか  
自由をえたるをめつてきおあてはせふふくうり後  
くふきわしあふ

しらぬにすて我らよきあら  
よあつたかたの里はうの持とて  
又うらなるり唐衣あきらめ  
なつちあきらみしりの里  
果はわたり舟花しあはるるの  
のまひしりしりしりしりしりしり  
あつたかたの里はうの持とて  
野尻しりしり  
十四日  
大井よきあら

十五日

あつたかたの里はうの持とて

### 熱海紀行

府吏の古母公ひあつたかたの里はうの持とて  
よち夏洲のあつたかたの里はうの持とて  
しりしりしりしりしりしりしり  
長月二日

あつたかたの里はうの持とて

うきしこやあんと折し杖のわえとんよむ旅森  
しんがらふ湯おのりこいさのなまふりた日ね  
おたひそりねらうーいさおちおちと山水浦はひき  
あひしーかきおのちの中と後りかしていさ  
なま網に釣るもいさおちれやうまておのちのたつき  
まよめさかー車かたぬ奥の各いさづかひいさ  
ら替ーなるいさぬいさぬのつら見えぬとてみさいさ  
山田さういさを荒遊ぶ山屋より夜いささす  
らー表とりの麻のもかぬよーいさんと夕霧のた  
るいさいさ守

夜の湯ーおん守袖を麻のす

月おはあふりかしていさおちのたえさ守袖いさ  
いさのたまきあやーいさおちのたえさていさ  
いさおちの着獨干ーいさかもいさ高帽いさ  
いさ衣と麻凡の陰いさいさいさ

ぼー俣の是ーいさや信俗衣

尾たらーいさいさいさの浦の波  
さませと後いさけたる 佐々ね

泊あやー葉山子のりわりの波の上

あまーの子度物ーいさまーいさの常いさ  
あまのけいさあまいさのいさーいさ  
葉のませあまーいさのまさかーいさの漢家の茶とてい  
遊まーいさこの火うりて歩後とまーいさいさ  
いさ例のあまーいさのまいさつていさ守登歩いさ

目うね山のやれは比叡事あり後豆の阿山暇下りうさの  
景色ふもこのやう富士の西へ隈かここの杖をたて  
きりきぎあ長錦尚綱かからんけい山の徳をす入きよそ

阿方山のうまやこまほしうき

卯ねりうさ公儀殿の後の跡のうさうおまをのらひはらり  
と病うられの財ま稀おに信り集るの后へおまをの  
事ありそそお敷の科とこいおまをのらひはらり  
と八岐うらひに信りままこいおまをのらひはらり  
とこいおまをのらひはらりおまをのらひはらり  
と外へうらうさう酒に強の信りままおまをのらひはらり  
とままおまをのらひはらりおまをのらひはらり  
とこれに信りおまをのらひはらりおまをのらひはらり  
おまをのらひはらりおまをのらひはらりおまをのらひはらり  
伐りうらぬおまをのらひはらりおまをのらひはらり  
とらきりおまをのらひはらりおまをのらひはらり

ねりてうまおまをのらひはらり

信りの初こいおまをのらひはらりおまをのらひはらり

おまをのらひはらりおまをのらひはらり

湯木信政の家族とらぬ

おまをのらひはらりおまをのらひはらり

伊豆信政事約

阿方山のうまおまをのらひはらり

業事井人屋中へありあの男女の常は水汲りけり  
て女のうさおまをのらひはらりおまをのらひはらり

まじきの新や井筒まよとま

午な馬場さふちの平なつひを

とて中のひよりのてはまのて

子しつとてこれあて立田姫

ま陽あふ

舞のちしきまをいむと古木

なのお

山のつと舞龍へつなのお

木のき

木のきよおのてはまのて

まら

まらまのてはまのて

天神

お石もあまのてはまのて

ふ鶴崎

あまの宿まよまきの冬の日

大崎の遠くまよまの

大——まよまのてはまのて

まよまのてはまのてはまのて

まよまのてはまのてはまのて

まよ

まよまのてはまのてはまのて

十月十三日あまのてはまのて

ら後余まよまのてはまのて



武彦野紀行

庚申のこゝに 霜月のほしあふりきり 江戸をさして 信  
戸とふりて 篠より 比叺のうりねん 十日あきり 女村ある  
みやりてるとあるに 比叺をさるるに 比叺のこゝに ありの  
中をくちきり 昔はくちきり 月の名は 武彦野とあり  
—— 今も家つらふり 田舎のこゝに ありのこゝに あり  
名もあゝ ぬか屋のこゝに ありのこゝに ありのこゝに あり

武彦野や今も茶屋は 杖尾だ

今も茶屋は 杖尾のこゝに ありのこゝに ありのこゝに あり  
て思ふに 杖尾のこゝに ありのこゝに ありのこゝに あり  
ちんちんちんちん 杖尾のこゝに ありのこゝに ありのこゝに あり

杖尾を過て 杖尾のこゝに ありのこゝに ありのこゝに あり

今も茶屋は 杖尾のこゝに ありのこゝに ありのこゝに あり

武彦野や今も茶屋は 杖尾だ

そゝちんちんちん

杖尾よ今も茶屋は 杖尾だ

杖尾よ今も茶屋は 杖尾だ

武彦野よ今も茶屋は 杖尾だ

又の白野火苗のこゝに ありのこゝに ありのこゝに あり  
高のハチヤキとて 杖尾のこゝに ありのこゝに ありのこゝに あり  
とて 業平塚とて 杖尾のこゝに ありのこゝに ありのこゝに あり  
とて 杖尾のこゝに ありのこゝに ありのこゝに ありのこゝに あり

杖尾のこゝに ありのこゝに ありのこゝに あり



内津草

うつゝの里に宿る更由居三叶からこの予う菴よまらぬ  
にそこの上にもなるものなる——せんこの原日  
幸ありつた今も老の特の月よりうらを懐て  
眠らたれぬものなる——うけ秋の月  
もくんとまらう上里のうらも——思まてら  
のうらもくんとまらう上里のうらも——思まてら  
はあ——うらもくんとまらう上里のうらも——思まてら  
止らぬものなる——思まてら  
てはらぬものなる——思まてら  
なりておきかへは牛の人形もたえうらも——今も  
舟宿ぬかたもくんとまらう上里のうらも——思まてら  
たり

おのころのうらもくんとまらう上里のうらも——思まてら

片丹

おのころのうらもくんとまらう上里のうらも——思まてら  
おのころのうらもくんとまらう上里のうらも——思まてら  
おのころのうらもくんとまらう上里のうらも——思まてら  
おのころのうらもくんとまらう上里のうらも——思まてら

おのころのうらもくんとまらう上里のうらも——思まてら  
おのころのうらもくんとまらう上里のうらも——思まてら

ふらちのなかに

ふらちのなかに

ふらちのなかに

ふらちのなかに

ふらちのなかに

ふらち

ふらちのなかに

ふらちのなかに

ふらちのなかに

ふらちのなかに

ふらちのなかに

の位作す

ふらちのなかに

ふらちのなかに

ふらちのなかに

ふらちのなかに

ふらちのなかに

ふらちのなかに

ふらちのなかに

ふらちのなかに

ふらちのなかに

ふらちのなかに

くけの骨——あふれすか

と哉はさうぢりたてし——あつたものも、  
く奉こならふよきこきいん大まきす。若もるせせ  
きんたら横たものて、くは溪泉いん、  
あふれすか

各——のきみの細ん——

いろそりのゆ律——つ——  
枝のちまむき——  
あつた

上ハ枝はとも新酒——はら

あつた——あつた——あつた——  
あつた——あつた——あつた——

名もはそくの十九枝の丸

と撥——そのまことありつ、  
よ——はら——あつた——  
白——ま——あつた——  
をありて——あつた——  
とて水の音若——あつた——  
り枕流亭と額と掲——あつた——

は——あつた——

け日妙見文、清と金よのい——  
あつた——あつた——  
あつた——あつた——  
あつた——あつた——



あつはひとちちられ片山里とちとちいり更山居はは  
しといと分試たうあちまきけのきますうすてうま  
て酒夜ふとしいとほいよちつうひたるあましいも  
々いふあ一方ちい目女うのちち

府下若杉寺よはきいよちり網圃和尚追隠  
てい望ん性ちちちる位かくりえりねるち  
らいすはるの隙はけいてとちりけりてゆりはま  
宗

深山客稀有孤猿豈謂高軒過遠村

煨羊無收寒涕力肯令王帶鎮空門

勅を齎て謝す

満耳溪泉又断猿渾忘塵想宿山村

逢君猶憶重遊約 嶺上雲多恐鎖門

あちちあちち酒すいじとていさきのついきありくまふ  
体は杜若とつりて水きりり冬洞してむらりたは  
茶花のあをちちよたの取とまわひちち

八月ねしちよは美らるかまひちち  
はていちちちちちちちち

若きよのこの蘇のあまひよちちちのゆきおちちち  
ち柿と様と造んちちちちちちちちちち血流しち  
人くちちちちちちちちちちち

ちちちちちちちちちちちちちちちち  
ちちちちちちちちちちちちちちち  
ちちちちちちちちちちちちちちち

あや—墨竹の一傷と—もて贅を求む唐はまのまが  
ま—と—  
絶とつかりて

不與梅柳交心似厭塵思

露深夜雨餘何借一妃淚

此書である

雨—  
新考—  
てなの山—  
人—  
居—  
り入—

と書である

廿五日か—  
不—  
か—  
秘—  
彼—  
や—  
ふ—  
か—  
と—  
て—  
の—

とまじ家におもせき事一守門のあふ川は流し岩をばら  
もまのちのなる階くまれとんたあのをたふすもな  
くおのつゝとあまや一たのあつゝと座禅ふ  
くさま岩あのをせいのれいさきまのりか

座禅よも目ハまふ山の杖の色

ゆるさのなるまゝとくもき事か一入してはのさくた  
の青に同さうなかり家門のいもまおらゝいふふふふ  
あく一もきもまをまはらひり一昔あまの徳のばぬ  
つゝいゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

三止ハ一もの事ゝりかゝいしゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
あまらゝあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
座禅よも目ハまふ山の杖の色

日々いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
てふはるれおのらゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
りゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

せうらんみゝゝゝゝゝゝの答う那

いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

進これゆゝゝゝゝゝゝの體

是ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
能滞一てたひつゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ついでその文獲るもけくむも直つれと事終つて御  
一の詩はいつ作りてある一の句

張北山林遠府城相逢 多日雅談清  
秋深老樹添霜色 夜静流泉疑雨聲  
驛馬稀傳都下信 啼猿常動客中情  
總看隣店商家在 豈比塵囂爭利名

いよいよよきてしるのししーくしあハ  
何よりうきにはそーらうき

あつらひとぬんすよすはなるあやの僧哉たれ事  
必まりて例の向陽子とてとてなされぬ

障もつらも義や山寺の杖のえれ  
あきーの来くくいてとてぬぬ

廿五日一つとありて内陣とててくある一は府下ま  
退らんそともふいお行厨の草かまらめくくして世を  
捨人よ仙けなきしとて又例のさよあれて

老武者の衣もなるおれさぬ盛  
いよいよ赤あまてとて一かあ

いよいよのいひわいひつとていよいよは世にうかまな  
くけふの夕をまらふしつれはなからり一祿とて一  
まの逢り一とて一ぼけ一はく一まの昔よりくちまた  
めあぬ物くくまはへの途とのくれおのつと名村は  
つふらの涙くまなりとていよいよや中々命つれなきならま  
とてあつらひも橋てふよといひとては林くち山や  
とていよいよ一あまよ一はあ家らのあや一まきまんに





とく天よりい神笑しし見果らん時をいりやめて  
家ため恥をといしへも

安永二年己九月 七十二翁犯夫也右

中つる衣

記余白俚言

相もく人のがり梅雨時のまのりもて同かて侍りそる  
あ〜一俚言もサ〜きりてつれなう〜いよのよら  
そこちもねれのの〜い〜い〜反古あつら〜い〜  
此を並あ〜いよ例の子供の踊〜い〜い〜の場を能く  
人よ〜の〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜  
〜あ〜の〜ま〜あ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜  
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜  
〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜  
能言〜と〜れ〜よ〜負〜い〜い〜思〜い〜め〜あ〜い〜あ〜い〜い〜

いふはよしくそ是か〜し出さし世に〜の〜  
あつ物うなとよ〜の様よ思ひ〜ま〜只とよ〜い〜にや  
ま〜ん我よ得〜せよ〜いひて取〜りつせは余白  
あ〜よよ〜を〜潜よ〜い〜めめ〜め題早〜い〜  
さ〜茶の湯よ〜い〜い〜め〜其人い〜り〜り

世の中よす〜わて〜るよ〜の山おき〜の竜田茶〜  
之治の都の辰こ〜れよ〜の〜の都の未申  
教〜〜の誰う名よ立て濃茶の文の海〜り松の  
位よ〜〜て〜困ひ〜い〜ひ〜れ〜情〜めれ〜  
床〜〜りか〜め誠あ〜合回ま〜人目の中〜り  
よ〜〜りい〜ぬ口切の後〜う名の下地忘〜れ〜  
月の〜〜〜て〜れ〜い〜い〜世の人の口よ待〜戸よ

立〜〜のあ〜〜て立者〜立者のゆ〜り〜  
池田岸山岸の雪〜い〜い〜ら〜むり〜其白岸の雪  
〜〜〜て雪よ〜あ〜ぬあ〜れは〜け〜て物〜めあ  
〜ぬ〜ぬ〜〜い〜ら〜い〜ら〜水〜人よあ〜  
の〜い〜い〜ぬのあ〜い〜い〜情〜い〜い〜あ〜るのす〜ぬ  
むぬの〜〜い〜あ〜い〜ら〜い〜け〜ら〜い〜ら〜ゆ〜  
あ〜い〜い〜あ〜い〜い〜い〜い〜あ〜の柄杓の行々  
直〜れ〜と〜ら〜ら〜茶杓のゆ〜い〜文字〜せら〜い〜  
茶せん〜い〜よ〜い〜あ〜まの辞〜い〜い〜や〜い〜んあ〜ぬ  
岸〜りのあ〜い〜ら〜ら〜夕暮のそ〜れ〜ハ〜ら〜め〜い〜  
くれよ五条あ〜りや四〜よ〜よ〜や〜長〜待合や  
茶〜すのめ〜い〜月〜日〜あ〜い〜い〜候〜生〜あ〜ぬ

かきくさりのまじりこころはちのこころ昔の  
のどいごととちのまて釜の中こめを煮くたりの  
末長くひげ万代も

思ふ近世女て主人とさつたりてもなれ行存よとて菊の女もあは  
りしころはれも人のまよひもさうさうなごころのこころをさすかへ

・ 辻君 ウタノ韻

月よこころも多きま いそ夜初と浮きまはら。  
神ハやまこの人よ招きま 松の葉よびやといふ。  
待てお因のこころと あめてまのぬかき。  
晴くこころのこころハ 馬場の花さのまやま。

・ 茄子 エケノ韻

むしこころのまよめさ まるくさるさのまよめ

柿よこころハまよめ

つげりのこころハ

みよこころのこころハ

瓜のこころハ

野菰の杖乃ゆめ

豆腐もも 恥こめ

凡語 ヲコノ韻

まよハハまよまよまよ。 まよまよまよまよ。  
かよまよのまよまよ。 まよまよのまよまよ。

公卿像賛

高き身よ浮雲 階登初て正風

そのけりりのはまをわしとひまよ人の教る  
定のまより 芭蕉ゆ裁ておく己うまよ

此をわらわく画く梅皮て笑ひ事をて高し  
差と推して旅の情まはる 管とてつて替るる 辞の

又 ウクノ韻

旅は故人よりいひし。しひるる旅故人とかりぬ。  
それより故人来故人 只せぬ人と慕ふとやす。

又 イキノ韻

詩家は李白として信じてよ。旅は柳をじて思ふに終り。  
うらよこるのなまら茶の味も しくよ百舌の舌よりく。

公相歌並同賛

題立旅は哀吟 尋花狂客心 豈無芬芳野句 可識不言深

人口 ウクノ韻

細も雪らりよあそりつ。 去年の葉のよも老や忘れむ。  
からあせ草せりつても。 今ものよの字の程とわらむ。

蛤 アカノ韻

ゆくの月の雀かうら。 竹の枝もよなれや。  
今より葉もよは替わら。 雲うけのやわらさ。

亭子園の音 ウクノ韻

~~~~~と夏のゆよにわらつ。~~~~~の~~~~~

一垂りたる名はあやうし つけをのころふらふらび

ふちの師よ書をあそび一聯句

空の海はゆきよほきて 桜の口の汐干しなむ  
糸の梅は水りよ落りて 雪の後は落葉もさる

大艶銘

賢人の年よつらぬり 凡の吹りよすまわら  
汗叩もよよふれり 雪の降る水ももなり

舞の賛

及ぶの舞は思ひよそと 意ふたれも舞はあやめ  
のふれは落る悔わる世は 測は信ふと安きなり

布衣賛

時々の世はあやうし 布の袋の名はなりぬ  
梅の肥はく我を知らぬ 意は愛はく梅を知らぬ

廻文

はくみつまつまて待てやうつこ草

御借方弁

嫁とての口はて立く 花丸もよとれぬ且ぬさく入り  
安波女とてハ善き身安方とてハ 意は愛はく梅を知らぬ

怪もとなりよのつひの糸屋味傳やもそのまよふゑこと  
とちりて。宛人よまよふ世のちねとゆめをわく給  
坊の口すけい。

あてなすよつこいしてまよふは縁の世いと當さういりり  
能活ちの古今集といつて能活新もあすりの集あよ  
あてなす人の能活ちを能活師のまよふにあすねらう  
とに活もふすねらう、全所の能活と求めも其物  
其よすりて能ののの。名はうり秀らうとよりな  
とちりてのちと全く言ふまよふもね求む能活ち  
能向一ツまよふて其よなまよふい活てい活の  
能活師のまよふは後のはねらうと云ふこと  
とちりてのちと全く能活ちを後のはねらうと云ふこと  
のちまよふて其よなまよふい活てい活の

いろは歌

いろはのや七文字をよみていさつくり六枚あよりませ  
それよなまよひてこそつくりなすよはねらう

和六林子雅伯題俳諧所寄歌上

芭芭翁持得又ル 百七世ニ色音遠ララス  
はせをまよふまらうとねらう ちよよらねのちす  
わかや詩作故百レト 誘ひ受けてたは民褒云フ

雪中三行傳

今雪ヨリ明初ル 誰裁又花總テ咲  
いまゆらりわけらうと くれぬねけなすて  
えにほわねのやめし ちのいとかせしよめら





東風回暖入岳阿 老對尊花泉若何  
六十餘齡今得九 人生誰道古來多

よむいさよむいさよむいさよむいさ  
ゆりの糸をゆるる腰せはくはらぬ者まじし御漱をゆき  
あせまの蔭の宿よりあけし秋るあけし春はこまきり

田島よ人こころんらひ羊の市

あまのこころんらひ羊の市

八勢子方

同平こつこつ門の人言

其人  
あけの階は行ゆは控う  
其師  
行例はくし屋も交ふふ力町

時  
延ひくくあおの空も五月晴  
天  
一もさるるやちねの嵐や

あま  
勤當の法よまらひの雲ころ  
伊  
まももまらるるわらわらハ浮世なり

本草文跡

傘と刺刀とさくわぬもの上うたまよりなまぬ食え  
自惚りこころくく切口あふ人のくく春はまされけり  
賢ハけとまお邦たよたり雨ハ衣の御しけん  
よむいさよむいさよむいさよむいさ  
よむいさよむいさよむいさよむいさ

あうーとてりし毒いふからるるまうつゝ内袋りる女うわ  
うーりしうりてむちうと夕ハゆりくく春くるはる  
うーり

ふりゆい

大草

権彦太らぬ

此文新より海をるれい

賢の邦大いふよりのあめのみ

廿四日

一海洲子文

このころ一頁をりや中へ海洲子う文一章あり世人  
柳川氏文ありて詩と銘と書とを御書又海洲子

うり惜む一五十の世ぬりぬまき文いつれり  
うせりいんりつる。世一章をくんで折るは忍びと又  
のころくさうもたうしきうく我う文草のような  
うめて返慕ぬ所む助とす

壽老先生傳 壽老

海洲

壽老先生ぬ山中か出そ人同は交りりつね  
一人臺上よ中しと陸爾り人あまき笑くはあひ  
怒れは怒りり只人よたり是を莫逆といふ  
あうねとも美人よをやれ醒き人よあたまれ  
やもそれの地よたうくくぬくのこあうくま  
いぬうれす久しく先生を洋さけ早う記社を  
拜るくよ先生や婀娜く義カ年よりし

秋の宵一度下り常々よよけき  
西窓よりいれ笑つゝ歯あ  
零悴やゝ乃須臾たゞいふ  
爾よりそれ人ハ一世ありて  
一葉の上は遍く  
素教の責いふとや先生  
言こつり先生をいれ先生も  
つゝ我ゆ臨めり長物決ま  
まゝに立居れり  
其後古も店も  
其後古も店も

武藏と旅支と

武藏と旅支と  
一は例のちめや  
あり  
ついで  
庭よ  
く  
う



世上國を新よつさへ一般鳥類并虫の〜

一 統の心回界を〜其外行能悪も品あは

ト渡修たちの条、とる度相守ト〜

一 蟬す〜の相織と着修事〜の至〜向後ハ横麻

一 羽め〜は仕替ト〜

一 松虫・鈴虫の〜〜蜜の〜〜て砂糖水と好〜

〜向後ハ野山の通露〜〜と精出〜

〜

一 蟻塔と〜事自力の功を以建立〜

〜事〜奉加ホ頼〜一切〜且又

熊〜へもわり修は大勢連〜無益の事〜

〜人〜ひも修〜

〜中〜火〜行〜所〜家の〜火の〜

〜氣〜あ〜得〜遠〜思〜

一 蜘蛛汚泥の内や〜細を〜り法虫と捕〜

事不中〜の至〜以後ハ其場而相思の運上〜

〜

・ 但幡〜り協ハ運上は不及事

一 蜜蜂の小便高直〜賣〜り法方の痛はなり〜

〜向後ハ世〜一統は只六拜〜の積〜

〜

一 蟻蟬己〜短〜の我修はま〜世〜

善い〜不〜千方は修向後ハ〜

あしきしき

一金魚のよき近年こころを美し柳あり向後  
舎館の飾一ヤのいさすましく

但赤塗は砂紅泊事あてはくす作

一 蛤春暖のころ己の快晴よふり樓一各を建しゆ甚  
奈のよき相らむと白後ハ右疥の普清一切毎用  
り一居宅の柳挿し根つたし用いす

一 蝙蝠益々橋下よりくれ居夜、人里村里へ徘徊し  
其をき得き鳥獸のあつたわさつた何處  
中ぬく紋糸ホ柳つとめさう不夜の至る向後ハ立合の  
支配をけし度又つとめさす

一 音喚鳥根は五色の綿備を着し  
向後ハ竹多し一色ハ柳改勿綿縫サ泊ホ一切し

一 白鳥白老ホ此同ハ柳を修老年ハ頭より白く  
稀くは近年後ハ柳よりす

一 胤嫁入の疥し柳同ハ井口胤は五并修り  
天井を躍たし柳さうく人、好ハ柳さうく様

一 得つては白酒を好む乱舞の泉奈のよき尋陽の江  
あておましく白後一切毎用し  
あて會合されありし一柳一柳はかきく修を

酒ハ其挿<sup>さ</sup>の<sup>り</sup>け酒屋<sup>し</sup>とて小買<sup>り</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>

一 裡<sup>り</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>と四<sup>り</sup>半<sup>り</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>共<sup>に</sup>立<sup>り</sup>人<sup>と</sup>送<sup>り</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>

金<sup>に</sup>派<sup>り</sup>と昔<sup>の</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>右<sup>の</sup>業<sup>の</sup>柳<sup>の</sup>止<sup>り</sup>

一 馬<sup>の</sup>太<sup>の</sup>鼓<sup>の</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>還<sup>り</sup>向<sup>り</sup>屋<sup>の</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>不<sup>の</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>畢<sup>り</sup>竟<sup>り</sup>

一 但<sup>の</sup>辰<sup>の</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>待<sup>り</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>柳<sup>の</sup>止<sup>り</sup>

但<sup>の</sup>辰<sup>の</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>待<sup>り</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>柳<sup>の</sup>止<sup>り</sup>

但<sup>の</sup>辰<sup>の</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>待<sup>り</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>柳<sup>の</sup>止<sup>り</sup>

合<sup>の</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>様<sup>の</sup>柳<sup>の</sup>止<sup>り</sup>

一 昔<sup>の</sup>鬼<sup>の</sup>赤<sup>の</sup>鬼<sup>の</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>鹿<sup>の</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>禪<sup>の</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>當<sup>の</sup>時<sup>の</sup>

病<sup>の</sup>犬<sup>の</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>早<sup>の</sup>速<sup>の</sup>仕<sup>の</sup>替<sup>の</sup>す<sup>の</sup>り

但<sup>の</sup>右<sup>の</sup>家<sup>の</sup>持<sup>の</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>借<sup>の</sup>屋<sup>の</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>召<sup>の</sup>仕<sup>の</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>

右<sup>の</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>柳<sup>の</sup>止<sup>り</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>急<sup>の</sup>度<sup>の</sup>外<sup>の</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>品<sup>の</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>蟻<sup>の</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>

組<sup>の</sup>頭<sup>の</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>越<sup>の</sup>度<sup>の</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>

玉<sup>の</sup>曆<sup>の</sup>九<sup>の</sup>卯<sup>の</sup>七<sup>の</sup>月<sup>の</sup>

玉<sup>の</sup>曆<sup>の</sup>九<sup>の</sup>卯<sup>の</sup>七<sup>の</sup>月<sup>の</sup>

玉<sup>の</sup>曆<sup>の</sup>九<sup>の</sup>卯<sup>の</sup>七<sup>の</sup>月<sup>の</sup>

應<sup>の</sup>菴<sup>の</sup>原<sup>の</sup>楚<sup>の</sup>中<sup>の</sup>老<sup>の</sup>人<sup>の</sup>之<sup>の</sup>書<sup>の</sup>

何<sup>の</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>中<sup>の</sup>高<sup>の</sup>店<sup>の</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>下<sup>の</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>朝<sup>の</sup>廷<sup>の</sup>

俗<sup>の</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>耳<sup>の</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>世<sup>の</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>

の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>

九<sup>の</sup>尺<sup>の</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>

と<sup>の</sup>誤<sup>の</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>

と<sup>の</sup>誤<sup>の</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>の<sup>り</sup>け<sup>ふ</sup>ふ<sup>り</sup>





くさる茶居の存はたあらざる處に千章のねに  
 ろく茶室山中は彷彿たりある一は之の圃にや々  
 かけてもついで茶をたてててそは安んずる人出を  
 わりさそふ靈験しあつたをめてはいたはたの茶  
 きてこそあらそきとてあはれこれの茶のほこ  
 ろは五文字と云ふはなは茶のめこそはつてお  
 ある一は白とて一とて一句とほつてやま  
 かんをやくの古製はたはあつてなほつてし  
 茶ハカともて公茶室の條に用をまよはぬ  
 ともいへ一鼎の茶茶とてしこのじやあはれ  
 さつてやく半杯庵のね又茶室はつてそのあはれ  
 落葉とてしたるたまの折あり

瓢長者傳

巴陵舎にいつの瓢ありとて此とて一曲は曲あはなき  
 とくえくもつてつて許ゆるらるるをうやを体はる集  
 くとしとあらは半流と舟と失ふはとまよはてて金の  
 價とせりともむし不之庵の翁は是と褒杯にて長者瓢の  
 二字とせしものおてけ名とやうてみつる瓢長者ハ  
 名宗の翁は長者の自標必しも翁のまよは守は瓢は不  
 思縁ありて而と茶と茶綿とてて不也仙術も幻術も  
 ありて只一婢一阮宣杖と持てて度中への世もむし初  
 虎の條にむしむし忽然とたは流りてしん宇治の物終  
 りては焼く米はるるむしむしは酒をるる目あはれもむし也  
 長者の事あり茶ありとて家つて流を求む平茶ははてはる  
 り

名亭説

あは洋々なる長江川を流れて向はる魏々たる揚子山にたてま  
よといある一の紫絃子とらう好亭と名付るは魏洋の二字を  
得る山間の月江上のれいとも世守りてとらふらんといはれ  
必しよあるを

悼六、審祥

桃が盛りよ梅が散るらば曉と世の心算もして六、庵の  
ぬけりたぬが時蕉門は後良の文世とあらとどい  
やけらへ家もさくさくハ本の推致とといひて  
のこをすの父貞静ハ孝とて人よるを思ひてま  
世のよましくハ名もすくられしとて承祖父のせむといひ

又岡の山より下よりまられたるは影一はらけらさ  
多く撰集よん名をさくこれにいてるよ世のよらぬ  
らきわつはよとていひていひていひていひて  
ぬけらるる西行は布の影はゆるとまきまのたの  
らけらるるのいひていひていひていひて  
まの影はゆる使わらるるのいひていひていひて  
いひていひていひていひて

標をいひていひていひていひて

典自若庵文

よのよの自若らりたれぬりし自若の  
影もつて瓢のたぬぬよまくしをよまらる

あゝいふは善哉る山子予に菴きりし  
甲白の二字をばくらすは名の中を  
称とす一子むのこむをいふてまた又自若  
し

夕夕がよわすのふあり發あり

名亭下辞

~~~~~ハ廿唇より~~~~~  
~~~~~ハ只物のみ~~~~~  
~~~~~ハ衣合短と刺せん~~~~~  
~~~~~ハ~~~~~  
~~~~~ハ~~~~~

長業寺碑

何よも人の思ふじよ法のるよ~~~~~

辞世

病来辞世路 久隱舞津農 八十余年夢 驚回曉寺鐘  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

平安書肆  
浪花書肆  
同  
東都書肆  
同  
同  
尾陽書肆

勝村治右衛門  
河内屋木兵衛  
敦賀屋九玄齋  
須原屋茂吾齋  
岡田屋嘉七  
前川六左衛門  
永樂屋東四郎

尾陽東壁堂製本畧目錄

上紙摺為用摺  
由好次才出末位

和書之部	萬葉集畧解	辛	伊勢物語	二
古事記傳	古今集遠鏡	六	玉勝間	十五
曆朝紹詞解	後撰集新抄	六	玉人一首	一
神代正語	同別記	一	波止みの鏡	二
神壽後釋	新古今集抄	五	江戸職人歌合	二
直毘靈	美濃の家苞	五	御遷幸長哥	一
萬我の比禮	同折添	三	八日新日記	一
葛花	尾張の家法と	九	地名字音轉用例	一
手大考	源氏物語手枕	一	天祖都城辨	一
冠位通考	三代調類題	六	和歌五百題	二

經書之部

明季遺聞

誹書之部

羣書治要

一

牧民忠告解

一

枇杷園發句集

二

四書集註道春点

十

女いまる免

一

同後編

二

同上紙

十

傳子

一

同類題發句集

二

同片假名附

四

常語藪

二

同三日月集

一

文選李善註

十

物數稱謂

一

同麻苺集

一

毛詩國字辨

十

律數揚權

二

同雀芝集

五

孝經鄭註

一

从翁茶史

三

同五七集

五

同指解

一

六諭衍義大意抄

一

同鳶の眼

一

服膺孝語

一

同瓢日記

一

國語定本

六

詩集之部

同菴の犬

一

莊子因

六

三野風雅

五

同法々花經

一

劉向說苑

五

暢園詠物詩

同隨筆

一

同考

一

日下新詠

同七部集

小本

二

同參註

六

晞髮偶詠

同二編

二

同上紙

十

畸人詠

同三編

二

同列仙傳

一

先友詩抄

同四編

二

韓文起

十

寒林刪餘

同五編

二

今世說

一

金山稿

也有翁鷄衣合本

四

世說音釋

五

宋詩合辟

同前編

三

左傳蒙求

二

清百家絕句

同後編

三

星渚堂對問

一

蒙求標題詠

同續編

三

木學參解

一

金城白湯集

同拾遺

三

論語參解

五

日本詠物詩

誹諧百人一首

一

醫書之部	醫家千字文	冢田物	一
積聚編	痘疹妙藥集	冢註周易	一
備考方	妙藥手引草	同正文	一
提耳談	易書之部	同毛詩	五
溫疫論	增補筮盲笈	同正文	一
藥品考	同文政再板	同六記	一
古方通覽	同增續	尚老子	一
方書摘要	同大全	左傳增註	五
經穴秘授	同極秘	孟子斷	二
醫事古言	同卦象解	昼錦行	一
吐方撮要	易道早合点	作詩質的	一
的治療方	人相早合点	江尾往還蹤	二

物品識名	佛書之部	論語羣疑考	二
同拾遺	釈迦應化畧諺解	大峯文集	二
蘭藥鏡原	宗門畧列祖傳	滑川談	三
醫生堂雜話	金斯幾	隨意錄	一
內外要方	閑居忘草	天文曆學之部	四
同二編	圓戒琢磨訣	天文四星風雨考	二
同三編	圓光大師御傳畧贊	天文候鑑	二
同四編	永平道元行狀圖	日用曆談	四
傷寒論持解	觀音施魚畏圖	觀象圖說	五
宋板傷寒論	現生護念之圖	晴雨管規	三
同正文	菩薩戒童蒙談抄	晴雨考	三
本朝水種方	唐士談語	晴雨考	一

手木物之部

猿山詩哥帖

正面摺之部

長雄書札集

同乞巧帖

土由敢寸珍孝經

長松貴札帖

同年中帖

漢魏隸書帖

空洞書翰

同尺一集

九疑山碑

大橋遺帖

同千字文

郭有道碑

同改年帖

同書通案文

義之周府君碑

同今川狀

同書札法帖

李邕沙羅樹碑

同池凍帖

同嵯峨名所

渤海藏真帖

同書用集

同四季か文

東坡自我帖

同當用集

同四季文集

同大江帖

同書札集

同江戸川用文

同歸去來詩帖

同新消息

同筆用集

董其昌天馬賦

同初學手本

同私用集

同衆鳥帖

同か手本

同清風帖

同秣陵帖

同庭訓往來

二節詩歌撒英

道風草書帖

同風月往來

消息案文

信海三六歌仙

同明衡往來

定家朗詠

陋室銘

同商賣往來

行成朗詠

草性譜

同江戸往來

筆曲大意抄

草木有毒圖說

同江戸名所

同二輪入

立花當用集

御家書札文海

諸禮大學

同當時用文章

煎茶早指南

同上紙

同永代用文章

同上紙

同早速千字文

神術極秘卷

十幹千字文

石刻法帖之部	畫譜繪手本之部	金氏画譜
朱子廟堂碑	北齋漫画	神事行燈
朱子風雪帖	北齋画譜	初二編
宋七君子法帖	同上紙	初學画手本
歐陽詢九成宮	一筆画譜	福善齋画譜
子昂要雀帖	兩筆画譜	武勇魁圖合
同羊公帖	同上紙	同二編
徂來大曆帖	英勇画譜	算法之部
廣澤樂得帖	道中画譜	本朝算鑑
米元章天馬賦	浮世画譜	開式新法
	同上紙	玉積通考
	同二編	點竈指南錄

繪本之部	同上紙	同二編
繪本新山科	玳琳漫画	同三編
同庭訓往來	蕙齋鹿画	同四編
同女今川	同二編	同五編
同彩色入	同三編	周髀算經圖解
同大江山	同四編	同國字解
同彩色入	同五編	算法工夫之錦
同曾我物語	北溪漫画	同發隱錄
同彩色入	北雲漫画	開運かんき記
同咲分勇者	同上紙	萬室大通考
同彩色入	文鳳鹿画	八木龍の巻
	同上紙	



字引節用之部	將碁之部	頁之首之部
滿字節用錦字選	將碁道標	棲鳳百人
同中紙	同觀手	同上紙
同上紙	同金襖	蓬萊百人
早字節用集	同鷺爪	同上紙
同上紙	同定跡	吾妻百人
同大全	同連珠	同上紙
同上紙	同名家友	錦葉百人
同真字附	同古今集	同上紙
同上紙	同相掛集	麗玉百人
四穀節用集	同指南車	同上紙
同上紙	同百番笈	今様百人

手紙早引集	同自在	同上紙
永樂古扶揃	渡世肝要記	女今川貞操鑑
同上紙	同二編	同上紙
同假名附	碁經之部	
同上紙	碁經奕範	秉穗録
初學古扶揃	同奕筌	同二編
同上紙	碁立手談	彼此合府
同假名附		延壽養生談
同上紙	大日本國郡全圖	養生要論

東都  
書物問屋

尾州名古屋本町通七丁目  
江戸日本橋通本銀三丁目  
濃州大垣本町

永樂屋東四郎  
同出店  
同出店

早稲田大学図書館

011688990990